

INTERVIEW

北海道家庭医療学センター理事長
草場鉄周先生



【プロフィール】 草場鉄周先生 福岡市出身、京都大学医学部1999年卒業。日鋼記念病院にて初期研修後、北海道家庭医療学センター・家庭医療学専門コース修了。ウェスタンオンタリオ大学(カナダ)家庭医療学講座大学院在籍。現在、北海道家庭医療学センター理事長、本輪西ファミリークリニック院長を務めるかたわら、日本プライマリ・ケア連合学会 副理事長、北海道医療対策協議会委員、北海道・西胆振保健医療福祉圏域連携推進会議在宅医療部会・部会長として、若い医師を育てながら患者に寄り添った地域医療を推進している。

北海道から、 家庭医のモデルを全国へ

聞き手：山田隆司 地域医療研究所所長

はじめて「家庭医療」を知った

山田隆司(聞き手) 今日北海道家庭医療学センター理事長の草場鉄周先生を札幌の栄町ファミリークリニックにお訪ねしました。草場先生は今やプライマリ・ケアの領域では著名ですが、私自身は先生がまだ研修をされているころからお付き合いさせていただいています。

まずは先生の経歴からお話いただけますか。

草場鉄周 私は福岡県出身で高校まで福岡で、京都大学医学部へ進みました。私が医学部へ入った理由は、人間の脳や心に興味を持っていて、そういったことを研究する学者とか、あるいはそれを扱う臨床医になりたいというような漠然とした思いでした。当時、養老孟司先生の「唯脳論」で脳がブームのようになっていた時期です。ところが医

学部に入ってみて、脳で人が分かるのかというと、実は一部しか分からないという現実を認識したのですね。もともと脳だけを扱うというよりは脳と心に関心があったので「人間をみる」仕事をしていきたいという気持ちがだんだん強くなって、医学部4年生のころには、人間全体をみるために心と体の両方をみられる医者になりたいと思うようになりました。

そんな中で一つの大きなきっかけになったのが、友人に誘われてCOMLの患者塾に参加したことです。当時、医学部では臓器や病気はいろいろ見えても、実習がほとんどなかったので患者さんが全く見えなかった。ところがCOMLの患者塾は、患者さんが集まって一つの健康問題をテーマに雑談し、考え方をまとめて発表してみんなで共有するというような形でしたが、全てが新鮮で面白いのですね。例えば、病院にかかる時に患者さんがどんなことを不満に思っているのかとか、何が不安でそもそも医者にかかっているのかとか、赤裸々に語るんですね。「こんなことはとても病院では言えない」と言いながらワットとしゃべられてすごく面白い。4年生から5年生にかけての2年間、毎月そこに通いましたが、やはり医学の勉強をするだけでなく人間の勉強をしないと、医者としては難しいのではないかと教えられました。

それで、当時は家庭医療というものを全く知らなかったもので、内科で幅広く診る医者になりたいと進路を考えていました。そんな時に6年生の春に、たまたま医学部のポリクリのロッカーに、北海道家庭医療学センターのエクスターンシップのポスターが貼ってあったのです。その案内の文章を読んだ途端、「あっ、これだ!」とじっくりきたのです。そこで6年生の夏に、室蘭の北海道家庭医療学センターで4泊5日のエクスターンの研修を経て、自分が考えていた医療というものにやはり近いと思い、センター長の葛西龍樹先生と

いろいろ話をして、北海道家庭医療学センターのレジデントになりました。

山田 当時はまだ卒後臨床研修は義務化されていなかったわけですが、独自のプログラムを作られていましたよね。

草場 はい。いわゆるスーパーローテーションは日鋼記念病院で2年間、その間にハーフデイバックという形で、家庭医療学センターのあった本輪西の診療所へ週に半日行って、外来と訪問診療、そして夜の症例カンファレンスを行うというプログラムでした。病院でやりながらも家庭医療を同時に学べたというところが大きかったですね。

山田 葛西先生がカナダで家庭医療学を学んで帰って来て、川崎医科大学で経験を積み、日本で初めて家庭医療学専門医のプログラムを作られたわけですが、そういう人材を見つけて、病院の中でそのプログラムを育ててきた当時の西村昭男理事長の卓越した先見性と指導力によるものが大きかったのではないかと感じていました。

当時、北海道家庭医療学センターを訪れる機会がありましたが、葛西先生がやろうとしていたことにみんなが呼応して、すごく活気があったことを覚えています。ちょうど先生は私が訪問したときにいらっしゃいましたよね。

草場 そうですね。2年間の初期研修のあと、家庭医療専門医の後期研修があり、私はその3期生ですが、そのころですよ。

山田 日鋼記念病院でのスーパーローテート研修は家庭医療研修医のためだけに用意された初期研修ですか。

草場 事実上はそうです。当時はそれ以外の人はほとんどいませんでした。

山田 家庭医志向であっても、2年間はスーパーローテートで知識や技術をオールラウンドにしっかりと学ぶという発想ですね。後期研修はどういうプログラムだったのですか。